



2019年度
国際キャリア教育プログラム
「合宿セミナー」

国際キャリア教育 事前学習資料集

主催：大学コンソーシアムとちぎ 宇都宮大学
後援：(公社)栃木県経済同友会 (公財)栃木県国際交流協会、
NPO 法人宇都宮市国際交流協会 いっくら国際文化交流会 JICA 筑波
協賛：(一財)栃木県青年会館 (公財)あしぎん国際交流財団

目次

(敬称略)

目標とルール	1
はじめに	2
実施要綱	3
プログラム	4
倫理綱領・個別ガイドライン・問題事例	5
「全体講義」との講師の紹介（重田 康博）	
混迷の時代の国際キャリアを考える－真のグローバル人材に必要な条件	6
分科会 A と講師の紹介（石川 尚子）	
変革の時流に乗って	8
分科会 B と講師の紹介（伊藤 解子）	
自己矛盾が無い、を仕事にしてみたら	10
分科会 C と講師の紹介（飯塚 明子）	
国際協力とキャリア：多様な生き方と無限の可能性	12
分科会 D と講師の紹介（佐藤 栄治）	
超高齢社会を考える	15
分科会 E と講師の紹介（廣瀬 隆人）	
いくつもの日本～アイヌ民族から考える多文化共生～	18
分科会 F と講師の紹介（岩井 俊宗）	
人の力を掛け算にするコミュニケーション	21

●目標とルール

国際キャリア教育合宿セミナーの参加者はルールを守り、目標の達成に向けて励んでください。

目標

- 「働く」とはということなのかについて考える。
- 自分と地域社会や世界とのつながりについて考える。
- 主体的に関わりたい分野を見つけ、今後の学びに向けた“きっかけ”を得る。

ルール

- どんな意見も臆せず、積極的に発言しよう。
- 一人ひとりが参加者の自覚をもとう。
- 異なる意見を尊重するとともに自分の意見をもとう。
- 自分独自の意見を述べよう。
- 多様な発想を生み出す雰囲気をつくろう。
- 時間厳守で行動しよう！
- 安全、健康に注意をしよう。

●はじめに

国際キャリア教育プログラムに参加される皆様

国際キャリア教育運営委員会 委員長
国際学部国際学科 教授

重田 康博



宇都宮大学、大学コンソーシアムとちぎ、そして全国の大学生、社会人の皆さん、国際キャリアについて考えたことがありますか。

大学時代に、就職活動に入る前に、国際キャリアのプログラムに参加してみたい、国際的な問題に対応する職場や海外で国際インターンをしてみたい、あるいは今、政府、企業、大学で叫ばれている、「グローバル人材」の育成のためのプログラムに参加してみたいと思う方がいるかもしれません。

そのように考えている皆さんのニーズに応えるのが、グローバルマインドを養う「国際キャリア教育プログラム」です。本プログラムは、宇都宮大学国際学部や栃木県の大学が中心になって 2004 年から毎年実施され、過去 15 年間における参加者数は約 1700 名に及び、多くの学生（宇都宮大学生、他大学等含）が参加しております。

このプログラムの科目は、学生が働く意味やキャリア教育について考える「国際キャリア教育」、英語で全て授業を行う「International Career Seminar」、国内や海外の企業、公的機関、NGO・NPO でインターンシップを行う「国際キャリア実習」の 3 科目、6 単位で構成されています。いずれも夏季と春季の休業期間に行い、講義は 1 科目 2 泊 3 泊の集中合宿方式で、キャリア実習は 80 時間で行います。本年度からは、新たに共通テーマを「グローバル化時代の地域とキャリア」とし、「地域からのグローバル化(Globalization)」、「地域のグローバル化 (Glocalization)」の 2 つの柱を立て、国際ビジネス、国際協力・国際貢献、多文化共生と日本、異文化理解・コミュニケーションの 4 つのテーマで分科会を構成します。講義ではその道のプロの専門家や講師を揃え、実習では国内・海外で魅力的で個性的な研修先を用意しています。3 科目すべての実習を勧めますが、選択的な受講も可能です。

「国際キャリア教育プログラム」は、毎年宇都宮市や栃木県内だけでなく、全国から大学生、社会人が多数参加します。皆さんもこのプログラムに参加して、国際キャリアについて一緒に学び、国際社会や地域社会への「キャリアパス」の可能性を探っていきましょう。

最後に、本プログラムは、栃木県からの支援を受けて、大学コンソーシアムとちぎとの共同事業として企画しましたが、その実施に際しましては、(公社) 栃木県経済同友会、(公財) 栃木県国際交流協会、NPO 法人宇都宮市国際交流協会、いっくら国際文化交流会、そして、JICA 筑波からご後援をいただきました。また、(一財) 栃木県青年会館、(公財) あしぎん国際交流財団からはご協賛をいただきました。ご関係の皆様からの多大なご理解とご支援に対し、主催者を代表して、厚くお礼申し上げます。

●実施要綱

- 1) 科 目 名： 国際キャリア教育～2019年合宿セミナー～
- 2) テ ー マ： グローバル時代のキャリア形成を考える
- 3) 日 程： 2019年9月14日（土）～16日（月）＜2泊3日＞
- 4) 会場・宿泊： コンセーレ（栃木県青年会館）
＜所在地＞〒320-0066 宇都宮市駒生1丁目1番6号
＜問合先＞TEL: 028-624-1417
＜URL＞ <http://www.concere.jp/>
＜地図＞



- 5) プログラム： 2頁を参照
- 6) 参加定員： 60名
- 7) 参加費： 13,000円（食費・宿泊費を含む）
- 8) 問合 せ： 宇都宮大学国際学部 事務室（5号館A棟1階）
担当： 大串
＜所在地＞〒321-8505 宇都宮市峰町 350
＜問合先＞TEL: 028-649-5172 FAX: 028-649-5171
E-mail: kokuca@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp

●プログラム（敬称略）

1日目（9月14日 土曜日）

時 間	内 容
09:00～09:30	受付
09:30～09:45	開講式・オリエンテーション
09:50～12:00	全体会（全体講義・ワークショップ）
12:00～12:50	昼食
13:00～13:20	趣旨説明（分科会および全体発表のプレゼン方法の説明など）
13:20～15:20	パネルトーク「グローバル時代におけるキャリア形成について」
15:50～17:50	分科会 1
	分科会「国際ビジネス A」 講師：石川 尚子
	分科会「国際協力・国際貢献 B」 講師：伊藤 解子
	分科会「国際協力・国際貢献 C」 講師：飯塚 明子
	分科会「多文化共生と日本 D」 講師：佐藤 栄治
	分科会「多文化共生と日本 E」 講師：廣瀬 隆人
	分科会「異文化理解コミュニケーション F」 講師：岩井 俊宗
17:50～18:30	チェックイン（事務局担当者より鍵を受領）
18:30～20:00	夕食・交流会

2日目（9月15日 日曜日）

時 間	内 容
07:30～08:20	朝食
08:30～12:00	分科会 2
12:00～12:50	昼食
13:00～15:30	分科会 3
15:30～17:30	分科会 4（分科会まとめ・中間発表準備）
17:30～18:30	中間発表
18:30～19:30	夕食
19:30～21:30	全体発表準備

3日目（9月16日 月曜日）

時 間	内 容
07:30～08:20	朝食
09:00～10:00	発表準備
10:00～12:20	全体発表
12:20～13:10	昼食
13:20～15:00	ふりかえり／意見交換／全体総括／アンケート記入
15:00～15:15	閉講式
15:30～	バスで宇都宮駅・宇大に移動・解散（現地解散も可）

1. 国際キャリア教育プログラム倫理綱領

本プログラムの関係者は、以下の原則に従って行動します。

- ① その活動において、常に基本的人権と個人の尊厳を尊重します。
- ② 国際学部並びに本プログラムの教育目標の実現に資する教育を行うために、改善と向上に努め、学生の自発的な学習を支援します。
- ③ 学修目標を明確に示し、学生への対応や成績評価などの学生指導全般において、公正を確保します。
- ④ 個人情報の保護に最大限の注意を払います。

2. 倫理綱領に基づく個別ガイドライン

以上の倫理綱領に基づき、特に以下の点について配慮をお願いいたします。

- ① 人種やジェンダー、言語、宗教、国籍、社会的背景、年齢等が異なる多様な参加者で構成されているプログラムであることに留意しつつ行動します。
- ② 食事や信仰生活を含む生活様式を尊重し、可能な限り対応します。
- ③ ハラスメントに該当する行為は決して行いません。
- ④ ハラスメントに関する情報を得たり相談を受けた場合には、放置せずに対応します。
- ⑤ 参加者による主体的な学びを尊重し、その提案や意見を積極的に取り入れます。

3. 具体的な過去の問題事例

(事例にある「参加者」とは、講師、スタッフ、学生等の参加者全員を意味します。)

事例 1) 国籍による差別発言

ある参加者から「A 国人は物を盗む」といった国籍による差別的な発言があり、その国籍を有する他の参加者の尊厳が傷つけられる事態が発生した。

事例 2) ジェンダーや多様性への配慮を欠いた発言

ある参加者が、男性的な服装をしている女性の参加者に対して、「いい歳なのだから、もう少し女性らしくしないと」とジェンダーに関する配慮に欠ける発言があった。その結果、トランスジェンダー¹であるその女性参加者の尊厳が傷つけられる事態が発生した。

事例 3) ハラスメントに該当する行為や発言

ある男性参加者が懇親会で他の参加者に酒を飲むようにしつつこく勧め、男女問わず「付き合っている人はいるのか」等と質問をして無理に答えを聞こうとしたり、女性の参加者に対して酔っ払いながら「肩をもんでくれ」と頼んだりした。

事例 4) 主体性や協働を認めない教育

分科会において講師が一方向的に講義を続けたり、一部の参加者のみが発言を独占する事態が発生した。その結果、学生たちが主体的に協力しながら行う議論や全体発表準備のための作業時間を、十分確保することができなかった。

事例 5) 許可を得ないで行う個人情報や写真の使用

ある参加者が、他の参加者の連絡先などの個人情報や撮影した写真を、相手の許可なく SNS などを使って公開し、別の目的で利用した。

¹ トランスジェンダーとは、出生時に決定された性別に性的違和（性同一性障害）があり、性別を変えて生活していたり、性別を変えたいと思っている人（性と人権ネットワーク作成パネル、2014年より）。

混迷の時代の国際キャリアを考える

— 真のグローバル人材に必要な条件 —

☆講師プロフィール

氏名：重田 康博（しげた やすひろ）

所属：宇都宮大学 国際学部 教授

国際キャリア教育運営委員会委員長



略歴：

北九州市立大学大学院社会システム研究科博士後期課程修了（博士・学術）

国際協力推進協会（APIC）主任研究員、クリスチャン・エイド客員研究員（イギリス・ロンドン）、現、国際協力 NGO センター（JANIC）主幹等を経て現職。専門は国際開発研究、国際 NGO 研究。開発教育協会評議員、JVC とちぎネットワーク代表。CMPS 福島乳幼児妊産婦プロジェクト・アドバイザー、JANIC 政策提言アドバイザー。著書に『NGO の発展の軌跡』（明石書店 2005）、『国際 NGO が世界を変える』（共著、東信堂 2006）、「第 4 章ミレニアム開発目標」田中治彦編著『開発教育—持続可能な世界のために』（学文社 2008）、重田康博『激動するグローバル市民社会—慈善から公正へ発展と展開』明石書店、2017 年

全体講義の内容

今世界は混迷の時代と言われています。その混迷の時代を生きるための真のグローバル人材とは何か、その必要な条件を具体的な事例を示しながら紹介し、国際キャリア形成について考えます。

★最初に、混迷の時代とはどのような時代なのかを説明します。

21 世紀は 9.11 米国同時多発テロに始まり、今日まで世界のいたるところで、未曾有の危機が発生しています。米国などの主導による経済のグローバリゼーションの進行により、かつての先進国と途上国の間の格差だけではなく、同じ国の中の富者と貧者、都市生活者と農今世界各地で、国家の分断、孤立、難民・移民の排除、自国第一主義とポピュリズムの波が押し寄せ、第 2 次世界大戦後世界の多くの国が目指してきた、「国際協調主義」と「共生・包摂・寛容な社会」の危機が叫ばれています。

このような「国際協調主義」と「共生・包摂・寛容な社会」の崩壊の危機の中で、NGO・CSO（市民社会組織）も含めたグローバル市民社会による多元主義の再構築と公共圏の形成が求められています。

この危機をどのように乗り越えるのか、どのように「国際協調主義」と「共生できる寛容な社会」を取り戻せるのでしょうか。混迷する時代を生きるためにグローバル人材をどのように育成すればいいのでしょうか。

★次に、「グローバル人材」とは、何かを説明します。

では、「グローバル人材」にはどのような能力が求められるのでしょうか。2011年6月文部省「グローバル人材育成推進会議」中間まとめでは、そのポイントとして、「語学力向上（英語）」と「内向き志向」の克服で、その取組みは「英語」と「海外体験」となっています。しかし、この「英語」と「海外体験」だけで今の混迷の時代を生きるグローバル人材を育てられるのでしょうか？

☆宇都宮大学グローバル構想―「地域からのグローバル化」「地域のグローバル化」に貢献

☆国際学部国際学科において養成する人材像（改組に伴い2017年4月から実施）

⇒21世紀型グローバル人材（グローバル人材）の育成

☆国際学部の卒業生は、その多くがグローバル企業、マスコミ、NGOなどで働き、国内外で活躍しています。

★最後に、地球公益を目指す「グローバル（地球）市民」について説明します。

「グローバル（地球）市民」として生きるためには、「グローバル（地球）市民社会」の育成が必要だと思います。つまり、「国際協調」を超えた「地球公益」を求めていく人間や社会を育て、「非寛容社会」から「寛容社会」への価値観の転換が求められています。

☆国連による「持続可能な開発目標（SDGs、Sustainable Development Goals）」は、2015年9月の国連総会で採択され、17の目標と169のターゲットからなり、2016年から2030年までの15年間世界の国々はこの開発目標の達成に向けて取り組み、その達成のために、国際機関、国家、企業、NGO・CSOが問題の解決に向けて取り組むことが求められています。

☆「地球公益（地球市民のための公益、Global Public Interests）」とは、公正な地球社会を求める世界の人々のための非営利活動です。その根底にあるのは公正、寛容、包摂、共生、多様性、多文化です。「地球公益」を求めることは、グローバルマインドを養い、グローバル人材を育成することだと思います。

参考文献

- 駒井洋監修/五十嵐泰正・明石純一編著『「グローバル人材」をめぐる政策と現実』明石書店、2015年
- 加藤／九木元『グローバル人材とは誰か 若者の海外経験の意味を問う』青弓社、2016年
- 重田康博『激動するグローバル市民社会―慈善から公正へ発展と展開』明石書店、2017年
- 友松篤信『グローバルキャリア教育―グローバル人材の育成』ナカニシヤ出版 2012年

変革の時流に乗って

☆講師プロフィール

氏名：石川 尚子（石川 ひさこ）

所属：オリオンコンピュータ株式会社 代表取締役、
オリオン IT 専門学校 理事長

略歴：

栃木県立今市高等学校卒業後、地元企業に就職。いくつかの職業を経験の後、最後の仕事で出会ったコンピュータの可能性を感じ、1998 年オリオンコンピュータ(株)設立。その後 2005 年オリオン IT 専門学校設立。現在、アジア圏の留学生に沢山学んでいただいております。



1. 仕事の内容・研究テーマ

私は 30 歳の時に、「オリオンコンピュータ(株)」を起業しました。初めは小さなパソコン教室から始まり、37 歳で「オリオン IT 専門学校」を設立しました。社名の通り、コンピューターと教育に関わる仕事を 20 年以上続けています。その中で、私の仕事は「繋ぐ」事だと考えて行動しています。

人と人を繋ぐ・国と国を繋ぐ・人と社会を繋ぐなど、IT と教育を駆使して「繋ぐ」を実践していきます。今年も、新たな事業にも取り組もうと準備を重ねています。

皆さんにお会いする時には、その事業が立ち上がっていたら幸いです。

2. キャリアパス

栃木県で生まれ・育ち、地元の高校を卒業後、地元の企業に就職。何度目かの転職先で、「コンピューター」に出会う。

このコンピューターとの出会いが、私の人生に大きな影響を与える。

「バブル崩壊」の波が地元栃木にも押し寄せた頃、初めて「不況」という体験をする。

しかし、経験の浅い（無知な）自分には、事の重大性が理解できず、「何とかなる」と安直に考えていた。そして、30 歳で起業する。

3. 分科会の内容

日本では、この 4 月から入管難民法の改定に伴い、多くの外国人労働者の入国が予想されます。勿論、日本でもこの外国人労働者の受け入れにより、働き方や社会などに大きな変革をもたらされると考えられます。特に、栃木県を含めた地方においては現在も多くの業界が人手不足に悩まされており、今回の入管難民法の改正は人材確保の追い風となることと思います。

一方で、外国人労働者を人手不足解消の為の労働力という一面のみで捉えていては、到底定着には至りません。これは過去の海外の移民政策の事例をみても明らかです。この変革の時流にどのように乗り越えて行くか？について皆さんと議論しながら「今、私たちに来る事・やるべき事」を探って行けたらと思っています。

4. キーワードリスト

- ・ 出入国管理及び難民認定法とは何か？
- ・ 移民政策とは何か？
- ・ 共生とは？

5. 参考資料等

「共生の社会学」…岡本 智周 著書

「今や世界 5 位 移民受け入れ大国 日本の末路」…三橋 貴明

「ふたつの日本 移民国家の建前と現実」…望月 優大

6. 事前予習用リーディング課題

- A) もし、自分が外国人の方と一緒に働くことになったら、どのように接する事がお互いを成長させられると考えますか？
- B) そして、その理由も考えて来ててください。

自己矛盾が無い、を仕事にしてみたら

☆講師プロフィール

氏名：伊藤 解子（いとう ときこ）

所属：国際協力コンサルタント、
NPO 法人日本国際ボランティアセンター（JVC）理事



略歴：

大学経済学部卒業後、英国大学院（開発学、地域学（東南アジア））留学。
東南アジアで日系企業勤務後、NGO（公社）シャンティ国際ボランティア会（SVA）で
東南アジア、アフガニスタン等での教育協力事業に 14 年間従事。JICA 本部、短期専門
家（ラオス初等教育事業）などを経て、2016 年より現職。主に ODA の事業評価業務に
従事。

1. 仕事の内容・研究テーマ

NGO 勤務時は教育開発、事業運営・評価手法、ODA への政策提言。現在は日本の ODA 事業（有償資金協力、無償資金協力、技術協力）について、通常事業完了後 3 年目に実施される事後評価にスキーム、分野、地域問わず従事。経済協力開発機構（OECD）開発援助委員会（DAC）で採択された国際的評価基準に基づいた評価を実施。学生時代に抱いた目標、「より良い国際協力」に貢献する仕事を続けてきました。

2. キャリアパス

<大学、大学院時代>

両親の影響で、幼い頃から平和な差別のない社会の実現について、問題意識を持って育つ。大学時代、日本の ODA 供与額が世界一となった一方、ODA の質への批判が高まる。ゼミでは南北問題をテーマにし、学外での ODA の実態に関するジャーナリスト、NGO の報告会に通う。サークルでは日韓学生交流会、模擬国連等に所属。開発を体系的に学び、英語力をつけるため就活をせず大学院留学。留学先では学業に没頭しつつ、学生寮に住み留学生たちと知り合い、生涯の親友を得る。休みには学割で欧州、アフリカ、東南アジア旅行。

<民間企業から NGO へ>

NGO 就職を前提に社会人経験を得るため英国から直接東南アジアへ。単身就職活動後、就労ビザの壁を越えて日系企業に就職（クアラルンプール、シンガポール）。日本人の駐在員と現地採用の格差を目の当たりにしながら、急速に発展するアジアの OL 生活を満喫。2 年半後、日本へ帰国し念願の NGO 就職（SVA 東京事務所（カンボジア担当））達成。

<NGO での 10 年>

入職 2 カ月後、研修のはずが倒れた同僚に代わり 3 カ月間の現地駐在。東京では主に後方支援（ご支援者対応、資金調達）業務。ご支援者に鍛えていただく。カンボジア駐在し帰

国後、アフガニスタン事業担当に異動。以降、緊急救援事業（パキスタン、バングラデシュ）、事業研究・評価調査、NGOのネットワーク（政策提言、NGO職員研修）業務に従事。愛・地球博出展で名古屋1カ月駐在も経験。NGO事業の醍醐味や限界、基礎教育協力の魅力と意義、始めるより終える大変さを痛感しながら、あらゆる業務を経験する。

<NGOでのマネジメント時代～現在>

入職後9年目以降、海外事業課課長、ラオス事務所所長職として組織・事務所運営（総務、経理、人事）に従事。仕事に全力投球した結果、自分にインプットが必要と考え退職。半年休んだ結果自己矛盾のない国際協力で働くことに。就活に苦戦後転職先で仕事と組織に慣れず退職。NGO時代の友人に助けられ難民支援調査や教育支援事業に従事しつつ、合間に関心があった事業評価の勉強、キャットスペシャリスト資格取得、保護猫シェルター・ボランティア、念願のカフェでのバイトで過ごした後、現在の会社へ。事業評価を仕事に。

3. 分科会の内容

国際援助業界で働くとは。国際協力事業とは。NGOでもODA事業でも共通して大切なこととは。仕事を通して目指すもの、価値観とのせめぎ合いとは。仕事を具体的にイメージできるようになることを目的に、ワークショップ、ディスカッション形式で進めます。分科会1：参加者自己紹介。国際協力、国際援助の仕事紹介（国際機関、JICA、NGOの事業について、そのなかで自分の価値観に見合う仕事とは）。

分科会2&3：国際協力「事業とは」？何を目指し、どんな方法で、何をする？

4. キーワードリスト

- ・国際協力
- ・政府開発援助（ODA）
- ・NGO
- ・事業運営
- ・政策提言

5. 参考資料等

●アマルティア セン『人間の安全保障』集英社新書、2006年

●JICA ラオス「コミュニティイニシアチブによる初等教育改善プロジェクトフェーズ2」プロジェクト概要、ニュースレター（可能な範囲で結構です）

<https://www.jica.go.jp/project/laos/013/index.html>（参照 2019年6月10日）

●シャンティ国際ボランティア会編『図書館は、国境をこえる—国際協力NGO30年の軌跡』教育史料出版会、2011年

●フランクリン・コヴィー・ジャパン（監修）『COMIX 家族でできる7つの習慣』PHP、2015年

6. 事前予習用リーディング課題

「第3部 国際教育協力のアプローチ：第8章、第9章、第10章」小松太郎編『途上国世界の教育と開発 - 公正な世界を求めて』上智大学出版、2016年；pp.115-160

国際協力とキャリア：

多様な生き方と無限の可能性

☆講師プロフィール

氏名：飯塚 明子（いづか あきこ）

所属：宇都宮大学 留学生・国際交流センター 助教

略歴：

兵庫県姫路市出身。米国の大学で経済学を勉強した後、インドの NGO での 3 か月のインターンシップを経て、神戸の NPO 法人 CODE 海外災害援助市民センターに勤務し、海外の災害復興支援に従事。オランダの大学院で国際協力を学び、NGO や国連勤務を経て、ベトナムに 3 年間駐在し、コミュニティー防災事業に従事。その後京都大学で地球環境学博士を取得し、日本の NGO のスリランカ事務所長として防災分野の官民連携事業を運営。2017 年 4 月から宇都宮大学留学生・国際交流センターに勤務。2 児の母。



1. 仕事の内容・研究テーマ

2017 年 4 月から宇都宮大学で働き始めて 2 年半。主に以下の仕事に従事。

・留学や国際交流に関する業務

海外留学や国際インターンシップについて興味のある日本人学生や留学生の相談にのり、留学生・国際交流課と説明会等を行う。また大学の国際化を推進するために、国内外の留学フェアや会合に出席したり、国際インターンシップの派遣先や協定校を開拓。

これまでの海外経験から、留学に興味のある日本人学生や外国人留学生の気持ち（不安や期待）に共感でき、自分の時を思い出したり、（時代は変わっているので）自分の留学時代との違いに驚きながら仕事している。特に海外から成長して帰ってくる日本人の学生や、宇大で充実した学生生活を送っている留学生を見るととてもやりがいを感じる。

・災害とコミュニティに関する講義や、留学生向けの講義を担当

宇大で働き始めて 3 年目に入り、基盤教育科目や全学科目で災害とコミュニティに関する講義を担当。また国際学部の専門科目や大学院では、災害と国際協力に関する講義を担当。

そのうち 2 つの講義「Risk management」と「Disaster Studies」は英語で開講。人前で話をするのはとても苦手で緊張するので、授業の前はいつもそわそわして、終わるとほっとする。英語の授業の方がリラックスして自分らしく表現できることを実感。

・コミュニティ防災や国際協力に関する調査研究

国内外の被災地におけるコミュニティを核とした防災活動（郷土芸能と災害復興、防災教育、ボランティア等）をテーマに研究。また海外の被災地におけるマルチアクター（政府、NGO、国際機関等）による国際協力支援も調査している。自分の興味のあるテーマを深く調査し、論文や発表を通じて公開するというのは、これまで仕事ではあまりなかったため、とても新鮮に感じる一方で、研究費や研究時間の確保、知識や経験の不足、論文を投稿し

てもなかなか出版が決まらない等、悩みも尽きない。

2. キャリアパス

[～20代] 兵庫県姫路市出身、高校まで姫路。高校は成績不良で、バトン部、バンド活動、アルバイトに打ち込む。

[～25歳] アメリカとオランダに留学、インドの NGO で海外インターンシップ。友人の誘いで神戸の NGO で翻訳のボランティアをしたことがきっかけで、海外の災害復興支援の NGO で働き始める。NGO での仕事は海外（スリランカ、アフガニスタン、イラン等）の被災地復興支援事業の運営、日本での事業報告会、講演、会報誌の執筆、理事会運営、支援者やボランティア、メディア、教育機関等との連絡調整等多岐にわたった。初めての仕事で学ぶことが多く、とても充実した日々を過ごし、その後のキャリアの基礎が築かれた時期。

[～30歳] 日本から出張ベースで海外事業を運営するのではなく、海外に駐在して事業に専念したいという思いから転職し、京都大学の研究員としてベトナムに赴任し、国際協力機構（JICA）のコミュニティ防災事業に3年間従事。毎週、山間部、平野部、海岸部の事業地に行き、住民の方からお話を聞きながら、ベトナムの研究者と事業を運営。現地の人々のニーズを踏まえて、防災だけではなく、栽培、養殖、教育、建築、文化、生活習慣等の活動も実施し、多国籍、他分野の研究者と協力して事業を実施する醍醐味を実感。

[～35歳] 結婚。ベトナムで一緒に事業をしてきた大学の先生のすすめで1年間の博士課程に入り博士号を取得。長男を出産。パートナーの仕事に伴い、大学を辞めて家族でスリランカに移住。次男を出産。スリランカ駐在の4年間のうち、最後の2年はスリランカにある日本の NGO の官民連携事業に従事。国レベルの防災プラットフォームを構築する仕事を現地 NGO と協力して行う。スリランカでヨガインストラクターの資格を取得。

[35歳～] 現地 NGO に事業を引き継ぎ、日本に帰国。留学や仕事で15年海外に住み、海外の現場で働き続けたい思いはあったが、日本国内の課題や日本の被災地についても関わっていきたくて、日本に生活基盤を移し、宇大で働き始める。また海外で様々な立場から防災に関わってきた過程で、コミュニティを核とした防災の必要性を強く感じ、現在の研究や教育に至る。宇都宮で運転免許を取得。

[40歳～] 宇大での仕事や宇都宮での生活に慣れ（運転以外）、現在長男は小学3年生、次男は1年生。今年9月からアメリカ、ボストンの大学で半年間研究留学。

3. 分科会の内容

世界中で発生している貧困や災害といった課題は、その地域の人々だけで解決するのは難しく、他の国や地域の人々の協力が不可欠です。この分科会では、国際協力に関わる多様なアクターとその役割を解説し、講師がこれまで実践してきた海外事業を紹介しながら、国際協力に必要なことや、どのように関わっていくかについて一緒に考えます。国際協力や防災をキャリアとしたい人もそうでない人も役に立つ内容なので主体的に学ぶことをお勧めします。

[分科会 1]

- ・アイスブレイキング（自己紹介）と導入講義「東日本大震災と海外からの支援」

[分科会 2&3]

- ・各自調べてきた国際協力のアクターについて発表
- ・国際協力とそのアクター（NGO、国連機関、政府機関、教育機関、企業、メディア、ボランティア、市民社会等）の解説
- ・国際協力の実践事例の紹介
- ・多文化共生ワークショップ：日本でできることは？
- ・国際協力ワークショップ：アクターを演じてみよう
- ・国際協力と無限の可能性：どのように関わっていくか？

4. キーワードリスト

- ・国際協力
- ・NGO
- ・国際連合
- ・ODA
- ・ボランティア
- ・SDGs

5. 予習用課題

上記のアクターのうち、最も興味のある国際協力のアクターを調べて、分科会で活動内容や役割等を5分程度で発表してください。

超高齢社会を考える

☆講師プロフィール

氏名：佐藤 栄治（さとう えいじ）

所属：宇都宮大学

地域デザイン科学部建築都市デザイン学科・准教授



略歴：

1976 年生まれ。厚生労働省国立保健医療科学院を経て、2010 年より現職。専門は、都市計画、医療・福祉（介護、保育、障害など）政策支援。近年では、医療計画策定に向けた基礎研究、地方都市における医療・介護の連携のあり方、公共施設のマネジメント手法等、国、県、地方自治体との実践的な研究に取り組んでいる。

1. 仕事の内容・研究テーマ

私はこれまで、都市や建築の諸問題を利用者や居住者の視点から捉え、その解決策を探る研究を行ってきました。特に最近では、生活のうえでさまざまな支援や配慮を必要とする、高齢者や障害者、こども、こどもを抱える就業者を対象に分析・研究を行うことで、あらゆる人にとって使いやすい都市や生活環境について考えています。研究の中では、実現可能な計画や施策策定の手段として各種統計情報や統計を地理的に表現できる地理情報システムや、ある側面から事象の理想像を示す理論モデルを用い、計画や政策の背景や数値の算出根拠を示しています。主として以下の研究を行いました。

（1）都市における高齢者の生活を想定した理論的なアクセシビリティ指標の開発

本研究は、郊外の集合住宅群や地方都市において、今後激増する高齢者の生活を徒歩による移動により担保しようとした一連の研究です。徒歩による移動には、対象地域の地形の状況、集合住宅の階段の有無、面的に広がった生活圏など、移動に際しての物理的な抵抗を指標化し、その困難さを露呈させています。有効性の確認された指標を用い生活利便性の低い地区を抽出し、それらの地区での生活手法や住み替えの提案を行いました。

（2）高齢者サービスの整備方針に関する研究

近年の介護施策の方針では、地域包括ケアシステムや介護サービス付き高齢者向け住宅等の整備が進み、地域での生活継続を担保するシステムの構築が急務とされています。国、都道府県、市区町村のそれぞれのレベルでの介護計画指針、地域包括ケアの捉え方が検討され、各自治体において具体的な制度設計が望まれています。現在、自治体と連携し研究成果を実際の計画に反映しつつ、さらなる研究の深化を試みています。

（3）医療施設配置計画、医療サービス提供体制の再構築に関する研究

近年の日本においては、人口減少や地域の縮退等を背景として、地域医療体制の再構築が求められています。人口減少に連動して社会的共通資本の総量が減少する社会において

は、医療サービスの提供にその効率性や公平性も求められています。医療サービス提供体制の適正化に向けた知見を得るため、居住者から医療施設へのサービスの到達性を計測することで、医療サービス提供体制の地域的特徴を定量的に明らかにすることを目的とし、提供体制再構築に向けた基礎的分析を試みています。

その他、子育てと就労・職住構造のあり方に関する研究、就学前児童施設や障害児・者サービスのマネジメントに関する研究、等を進めています。最終的には統合的な社会モデル構築(社会的共通資本のあり方)に向けた複雑系の社会分析を進めていきたいと思います。

2. キャリアパス

私は宇都宮大学工学部建設学科を卒業した後、東京都立大学大学院・工学研究科建築学専攻・修士課程・博士課程(現、首都大学東京)と進学しています。進学を決めたのは、もっと世の中の仕組みが知りたい、世の中の問題を解決する仕組みを知りたい、という知的好奇心からだったと思います。実際、修士課程を修了する時に企業の内定をもらっていましたが、知的好奇心が勝り博士課程に進学しました。専攻した都市計画・空間情報科学分野は、社会問題を数理的に解く研究が主流です。様々な問題解決手法(分析、解析、数理モデル、統計処理、大容量データの分析、シミュレーション手法など)を、学生の間で学びました。大学院修了後は、学術振興会の研究員(高齢者の生活基盤整備の研究)、明星大学アジア環境研究センターの研究員(タイの農業・都市政策)、厚生労働省の研究員(子育てと就労に関する研究、介護政策に関わる基礎研究、医療サービスの公平性に関する研究など)を経て、現在の宇都宮大学で教員をしています。

一見バラバラに見えるキャリアですが、社会問題を解く、またその解法から導きだせる将来像を明示する、という、自身の知的好奇心を掻き立てた事柄からは逸れていません。それらを社会に役立てることのできる場所に異動していったと思います。

3. 分科会の内容

【テーマの概要】

日本の超高齢社会化は世界一進んでいるとされ、日本が抱える社会問題は、今後超高齢社会を迎える国々から注視されています。本分科会では、超高齢社会の現状を知ると共に、国際的な社会的共通資本(医療・介護)のあり方について多文化共生の観点から議論します。

【テーマの背景にある問題意識】

超高齢社会の背景には、それぞれの国の社会保障制度、憲法、そして大きくは倫理観が関連してきます。それらの全てを分科会で説明するには時間が足りなく、断片的な情報の提供となりますが、皆さんの興味に合わせ背景を説明していきます。

【分科会の進め方】

以下の内容を想定していますが、興味、進度によって調整していきます。

- 1) 超高齢社会の現状のレクチャー
- 2) グループでの検討の上、超高齢社会を議論する論点の整理
- 3) 設定した論点についての情報収集、分析(web等を利用)、課題解決方法の議論
- 4) 個人や組織、国単位でのアクションプランの設定

4. キーワードリスト

- ・社会的共通資本
- ・超高齢社会
- ・医療・介護問題
- ・他国での高齢期の過ごし方

5. 参考資料等

- ・高齢社会白書，内閣府，<http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/index-w.html>
- ・社会的共通資本，宇沢弘文(著)，岩波書店，ISBN-10: 4004306965，ISBN-13: 978-4004306962

6. 事前予習用リーディング課題

上記の2種の資料を事前に目を通しておくことが望ましい。

いくつもの日本

～アイヌ民族から考える多文化共生～

☆講師プロフィール

氏名：廣瀬 隆人(ひろせ たかひと)

所属：宇都宮大学 地域創生推進機構 コーディネーター

略歴：

北海道白老町出身。北海道で高校教員、

北海道教育庁文化課勤務を経て、国立教育会館社会教育研修所(現在の国立教育政策研究所)勤務。2000年～2015年まで宇都宮大学教授。

専門は成人教育学、ノンフォーマル教育、人権教育、地域づくりなど。

現在は、栃木県人権施策推進審議会会長、団体役員など。



1. 仕事の内容・研究テーマ

週4日は、宇都宮大学地域創生推進機構でUUカレッジ担当のコーディネーターとして勤務。主として社会人に大学の授業を公開し、受講者を支援する仕事をしている。

週末や休日は、6つの団体の役員をしているので、その活動に力を注いでいる。団体は、一般社団法人とちぎ市民協働研究会、認定NPO法人とちぎボランティアネットワーク、NPO法人とちぎ協働デザインリーグ、NPO法人かぬま教育支援ネットワーク、NPO法人プロジェクト宙、社会福祉法人蓬愛会などである。この他に、山形県南陽市、日光市大沢地区などで青年団の育成に携わっている。公民館、青年団といったレトロな社会教育に強い関心がある。又、鹿沼市で毎年3月に開催している「子どもまち ミニかぬま」の実行委員長をつとめている。

2. キャリアパス

北海道白老町に生まれた。周囲にはたくさんのアイヌの人々が住んでいた。子どもの頃なので記憶はない。その後、苫小牧市、夕張市、静内町、札幌市など転々とした。

大学を卒業後、北海道のオホーツク沿岸の町で高校教師として働いていた。主に日本史を教えていた。大学生の頃から「地元、地域」という言葉に強いこだわりがあった。高校生に地元のことを教えることに使命感を感じ、地元の埋蔵文化財、アイヌ語地名、歴史の教材をつくり、生徒に地元で生きることを問いかけてきた。ややこしい教師だったのだ。地元の山や川の名前(アイヌ語)を定期テストに出題した。しかし、生徒はそもそも地元に関心がなく、誇りが持てないのだ。「何もないまち」という強い刷り込みが生徒の心を支配していた。当時の北海道では、「開拓の歴史」という印象が強く、アイヌ民族の歴史や文化は、生徒の歴史意識の中に存在していなかった。人権感覚や多文化共生などという発想は脆弱なものであった。地元には長い歴史とアイヌ文化があることを伝えようと地元で発掘調査を誘致したり、生徒ともに地元のことを調べる日々が続いた。その中で地元のア

アイヌ語地名の調査を始めて、地名解釈の本を出版した。その中で多くの住民に聴取り、教
えを請うてきた。地域住民という「成人」に出会うことになる。高校教師をしていたため、
出会う大人のほとんどは保護者。それ以外の成人との出会いはインパクトが大きかった。
のちに成人教育学研究に向かうことになる。

そんな活動をしていたため、当然職場では浮き、変人扱いだった。社会教育の道にとい
う誘いがあり、その後は、北海道立砂川少年自然の家、北海道教育庁文化課などに勤務す
ることになった。そこで高等学校のアイヌ民族に関する指導資料の作成に係わることにな
る。会議の中では何度もアイヌの人たちとの摺り合わせを行い、合意を得ながら進めるこ
とになった。その後、文科省に出向を命じられて、上野公園にある社会教育研修所に勤務
するようになった。働きながら夜間の大学院に通い、成人教育学を学んだ。研修所の仕事で平
沢安政先生の人権の講義に強い衝撃を受けることなる。アイヌに係わりながら、自分の人
権感覚の未熟さに茫然とすることになった。多文化共生の課題は自分の中にあったのだ。
その後、2000年に宇都宮大学に着任。

3. 分科会の内容

分科会では、

日本列島には古くからアイヌの人々が住んでいた。本州以南で暮らしてきた人たちと
は異なった北の風土に根ざした豊かな文化を今に伝えている。しかし、アイヌ文化は研究
が進展しておらず、**未だにわかっていないことが多い**。「日本文化とは何か」を考えると
きに、アイヌ文化を抜きに語ることはできない。日本国内には、他にも多くの異なる歴史
や文化を持つ人々が**共**に暮らしているのだ。今後は多くの外国人労働者が日本社会で生き
ていく。「異なる」ことや「多様」であることを社会の価値ととらえて、多文化共生を検
討していきたい。

参加者がそれぞれの経験を語り合い、自分の人権感覚と向き合う時間にしたい。それぞ
れの日本、いくつもの日本がそこにたち上がってくる。そのことに気づく時間を持ちま
しょう。

(0)内なる多文化、異文化経験を語る(アイスブレイク)

- (1)アイヌ文化を知る(歴史と文化)
- (2)アイヌ文化の特性を理解する(歴史と文化)
- (3)多民族国家としての日本(多文化と人権)
- (4)アイヌ差別をめぐって(多文化と人権)

4. キーワードリスト

- ・アイヌ民族
- ・ウイルタ
- ・アイヌ文化振興法
- ・多文化共生
- ・**人権**

5. 参考資料等

- ①中川裕監修『楽しい調べ学習シリーズ アイヌ文化の大研究』PHP 研究所 2018年 3,000円
- ②加藤・若園『いま学ぶ アイヌ民族の歴史』山川出版社 2018年 2,000円
- ③坂田美奈子『先住民アイヌはどんな歴史を歩んできたか』清水書院 2018年 1,000円

- ④角田陽一『図解 アイヌ』新紀元社 2018年 1,360円
⑤北原・簗島『アイヌ もっと知りたいくらしや歴史』岩崎書店 2018年 3,000円
⑥中川裕『アイヌ文化で読み解く「ゴールデンカムイ」』集英社新書 2019年 972円
(①⑤は、児童向けの絵本、②は一般向け・高校用の指導資料、③④⑥は一般向け)

6. 事前予習用リーディング課題

次のうち、いずれかを選択してください。

- (1)『ゴールデンカムイ』の漫画本又はその映像をみておくこと。
- (2)上記の参考文献のうちいずれか1つを読んでおくこと。

(貸出し用に各一冊は用意してあります)

人の力を掛け算にするコミュニケーション

☆講師プロフィール

氏名：岩井 俊宗（いわい としむね）

所属：非特定営利活動法人とちぎユースサポーターズ
ネットワーク 代表理事

略歴：

1982 年生まれ。栃木県宇都宮市出身。2005 年宇都宮大学国際学部卒業後、ボランティアコーディネーターとして宇都宮市民活動サポートセンター入職。NPO・ボランティア支援、個別 SOS に従事。

2008 年より若者の成長機会創出と持続的に取り組む人材を輩出し、若者による社会づくりの加速を目的に、とちぎユースサポーターズネットワークを設立。2010 年 NPO 法人化。代表理事を務める。その他、認定 NPO 法人宇都宮まちづくり市民工房理事、栃木県協働アドバイザー、一般社団法人とちぎニュービジネス協会議事理事等、他多数。



1. 仕事の内容・研究テーマ

若者の力を活かして、地域の課題解決・活性化を加速することを使命とし、若者の挑戦と新たな力・新たな変化を求める地域の現場をつなぎ、育むプログラム開発・コーディネート事業を実施。

【独自事業】実践型インターンシップ GENBA CHALLENGE(2012～)、ソーシャルグッドスタートアップキャンプ「iDEA→NEXT」(2012～)、ソーシャルビジネスセミナー(2014～)

【受託開発事業】宇都宮大学課題発見・解決型インターンシップ(2013～)、栃木県 UJI ターン促進事業「はじまりのローカルコンパス」(2015～)、宇都宮市起業家精神養成講座「起業の実際と理論」(2015～)、那須烏山市ローカルベンチャー育成事業(2016～)、栃木県地域づくり担い手育成事業(2016～)、宇都宮大学 宇大未来塾(2017～)、コカ・コーラジャパンボトラーズ CSR 事業「ミライ×キャンパス」(2017～)

創設から 9 年、関わってきた 20 代～30 代の若者は、23,000 人(活動時間 82,000 時間)を越える。その内、自らの意志と力で課題に立ち向かう起業した若者が約 42 組輩出。また組織の次の一手を創り出す現場に若者が長期間参画する実践型インターンシップや行政施策のプログラム開発など、多様な組織に若者の力を取り入れた変化を提案・実施するプログラム開発と運営、それらを通じて化学反応として新たな価値を創出する「触媒」の機能を持ったコーディネート力は、他県からの講演依頼や『ソトコト』などの全国紙にも取り上げられることを踏まえ、高いものと自負している。これらの実績から、変化を創り出していくコーディネート事業に加え、若者と民間企業、また行政(国、県、市)、大学、をパートナーとし協働による事業推進をしていることが独自性であると捉えている。

<受賞歴> 中小企業庁表彰 創業機運醸成賞 (2018.2.9、全国 22 団体)、下野新聞社

「とちぎ次世代の力大賞」奨励賞(2018.5)

2. キャリアパス

1982年宇都宮生まれ。4人兄弟(長男)、7人家族。幼少期は、ガキ大将。森に基地を創って遊ぶ。小学生：サッカーに打ち込む。夢は、冒険家と医者。中学生：バスケットボール(部長)に打ち込む。生徒会長→リーダー的役割を主体的に捉えるようになる。

高校生：JRC部。2年の夏、赤十字派遣でネパールへ。3週間現地で井戸掘り、学校見学、献血事業視察。→将来、“途上国で働く”ことを描き、現地の日本人の駐在員にどうしたらその仕事に就けるか手紙を書く。“大学生で世界の勉強してください。英語+もう1ヶ国語”→大学に行く意味を見つける。→地元で、それができる大学が。

大学生(宇大国際学部、友松研究室)：NGOマネジメント、住民主導の開発を専攻。2年生くらいから国内問題にも目を向ける。特にNGO・NPOなどの市民による社会課題解決に可能性を感じるものの、職業として成り立っていない現状→“NPO・NGOで飯を食うモデルになる”と自分に旗を立てる。

2005年大学卒業後、ボランティアコーディネーターとして、NPO・ボランティアを支援する宇都宮市民活動サポートセンター入職。制度では支え切れないSOS(年間100件程度の相談)に、ボランティアチームを組み対応する。その中で大学生等若者が関わると突破できる数多い体験から、2008年若者の成長の機会創出と持続的に取り組む人材を輩出し若者による社会づくりの促進を目的にした事業を行うとちぎユースサポーターズネットワークを設立。2010年NPO法人化。現在代表理事を務める。

現在36歳、妻(国際学部同級生)9歳の息子、3歳の娘と4人暮らし。学生時代の趣味は、国内外を旅すること(屋久島、ママチャリで富士山・成田空港・レインボーブリッジ、アメリカ、韓国、マレーシア、シンガポール、ベトナム)。

3. 分科会の内容

- ・人の力を掛け算にするコミュニケーションとして、質問力、言葉の意図を読み解く力、建設的に意見を積み上げていく思考、相手のHAPPYを提案していく力を養う。
- ・演習(ワークショップ)を通じて、実践的にコミュニケーションを重ね、自身のやりたいことの実現に向けて仲間の力を借りていくこと、またそれが相手に対してもHAPPYに感じられる提案を創り出していく。
 - ▶コミュニケーションとは何か。
 - ▶人が喜びに感じるメカニズム、マズローの5つの欲求、ジョハリの窓など。
 - ▶アイデアを形にしていくプロセスと提案書の作り方

4. キーワードリスト

- ・コーディネーター
- ・ダイバーシティ
- ・価値創造

5. 参考資料等

特に無し。

6. 事前予習用リーディング課題

- ・自身の自己紹介をご用意ください(氏名、所属、大学で学んでいること、分科会を選んだ理由、将来の展望、今回持ち帰りたいこと)

2019年度国際キャリア教育プログラム「合宿セミナー」
「国際キャリア教育」事前学習資料集

発行日：2019年7月24日

発行：宇都宮大学 国際学部

〒321-8505 宇都宮市峰町 350

TEL: 028(649)5172 FAX: 028(649)5171

E-mail: kokuca@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp

学部		学科	
学年		氏名	